

地下球場

佐野 洋



佐野
洋

地下球場

一九六三年十月十日 初版印刷
一九六三年十月十五日 初版発行

定価 三四〇円

著者 佐野 洋

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話 東京(30)三二〇一
振替 東京 一五六五三

印刷 大文堂印刷

検印廃止

© 1963 Y. Sano

Printed in Japan

目次

第一話 黒い鞆を狙え……………5

第二話 ロスからの男……………78

第三話 強打者牽制……………149

裝幀者
岩崎
鐸

地下 球場

第一話 黒い靱を狙え

1

昭和三十七年四月七日。それが、どういう日であるか、言うまでもあるまい。しかし、最近は、あまりにも、いろいろなことが起りすぎるし、人々も忙しくなっている。すべての事件を記憶していろと要求するのは、無理でもあろう。そこで、当日の夕刊の記事を紹介することにする。

プロ野球公式戦ひらく

好天、ファンどっと

後楽園、正力氏が始球式

ファン待望のプロ野球公式戦は七日後楽園（国鉄―大洋、巨人―阪神）神宮（東映―大毎）中日（中日―広島）大阪（南海―阪急）平和台（西鉄―近鉄）の五球場

で一斉にフタあけた。東京地方は朝から晴れ間が多くなり、午後には初夏を思わせる暖かな野球びより。後楽園、神宮の二球場にはサライーマン、家族づれのファンがどっと押しよせた。

セ・リーグの四強が集まって前人気上々の後楽園は午前九時半の開門に七時ごろからファンの列が並び当日売りの入場券はアツという間に売り切れ。試合が始まるころにはスタンドはほぼ満員。鈴木セ・リーグ会長のあいさつ、新人選手の紹介、午前零時二十五分プロ野球の父・正力松太郎氏の始球式で国鉄―大洋戦がはじまった。

プロ野球に開放された神宮球場では、日米両国の豪華なプラスバンドのパレードで氣勢をあげ、午後二時半、東都知事の第一球で東映―大毎戦が火ブタを切った。

（四月七日付、読売新聞夕刊四版改造版）

ついでに補足すると、この日は、日本プロ野球史においても、一つの意味を持っているのである。見方によっては、プロ野球が新しい発展段階に突入したと考えられるからだ。

『新しい発展段階』——それは、どういうことなのか？しかし、作者は、いますぐに、その答えを紹介しよう

とは思わない。それよりも、先に紹介すべき人物がいるのだから……。本編の主人公、弁護士の小智新である。

小智は、この日、東銀座にある事務所を早目に閉めて、後樂園に出かけた。もともと、彼はプロ野球の熱狂的なファンというほどではなかったが、毎年開幕第一戦だけは、後樂園に通うことにしていた。

正午少し前、彼が後樂園に着いたときには、すでに内野席券は、全部売切れてしまっていた。小智が外野席の方へ回ろうとすると、すれ違いざま、

「内野指定あるよ」と、囁きながら足をゆるめた男がいる。いわゆるダフ屋である。しかし、小智は、それに取合わなかった。聞えないふりをして、そのまま行き過ぎた。

絶対にダフ屋の世話にならないとか、物価統制令に違反するようなことを、法律家の自分がやるわけにはいかないと、固く心に決めていたのはなかった。ただ、長いベナントレースの、第一戦を見るのに、そんな無理をしてまで、指定席にはいる必要はないというほどの気持ちだった。そして、ダフ屋に用がないときは、値段を聞いたり、話しかけたりせずに、黙って歩き去るのが、最も賢明な方法なのだ。

彼は、ライト寄りの外野席に手頃な場所を見つけた。四月の初めにしては、太陽の光が強かった。合着の背広では、着ていて、暑いようである。

試合は、国鉄―大洋戦で始まった。

予想通り、国鉄は金田を立てた。ことによると、今シーズン中に、三百勝に達するかもしれないと言われていた金田は、開幕第一戦の先発投手になったことが、楽しくて仕方がないようだ。もっとも、それは、外野席から、背番号34を見た小智の印象に過ぎない。遠くて、とても、金田の表情を、うかがうことなどは、できないのだから。

小智自身は、金田が登板したのを、喜んでいたので。鳴物入りで大洋入りした三A級のマクマナスが、どれだけの腕を持つか、それを知るには、金田とぶつかるのが最もよいと小智は思っていた。後樂園にやって来る気になった一つの理由に、二人の勝負を見たいという望みがあったのだ。

しかし、スタートの金田は、必ずしも本調子ではない。いくぶん、球が上ずっているようだった。

大洋のトップ、近藤（昭）が、この金田をたたき右前安打、二番の鈴木（武）はバントで、ランナー近藤を送り、次打者近藤（和）が中前にヒットして、一死一、三

塁になった。

いよいよ、マクマナスの登場である。

だが、ここで気持ちのよかったのは、国鉄のベンチであつた。金田の調子が、完璧ではないのだから、監督がベンチから、出て来ても不思議ではないのだが、そういう気配は少しもなかった。マクマナスと勝負をしろというわけである。根来と金田が、マウンド近くで相談するというようなこともなかった。

金田は、マウンド上で、大きな息をしてから、セツト・ポジションにはいる。

第一球は、ドロップらしいボールであつた。打気を誘つたのであらう。それとも、マクマナスの選球眼を調べる氣だったのか？

二球目、こんどは、左打者の内懐へ食い入るような、内角への速球である。マクマナスのバットが回る。だが、遊撃へのゴロ、杉本が確実な捕球して、土屋―星山とボールが渡り、見事な併殺に終わった。

多くの新人たちに対して、いままでそうであつたように、金田はマクマナスとの、最初の対決に、完勝したのである。

小智は、何ということなしに、溜息をついた。

しかし、溜息をしたのは、小智だけではなかった。後樂園のスタンド全体（まだ、ネット裏や内野のボックス・シートには、かなりの空席が目立ってはいたが……）から、唸りに似たどよめきが起り、すぐそれに、拍手が続いた。そのどよめきは、小智のそれと同じ溜息の集まつたものではなかったらうか？

スタンドを売歩く、ビール売りの声が、一きわ高くなつた。

「ビール、三つくれ」と、彼のすぐ隣で声がする。

「え？ 三つ？ あんた二つも飲むの」と、驚いたような女の声。小智は、その声に誘われて、女に視線をやつた。

女は、かなり、まとまつたマスクをしていた。淡いブルーのスーツの着こなしも、悪くはない。しかし、化粧から見ると、いわゆる素人ではないようだった。恐らく、夜の勤めを持っているのだろう。

すると、男は？ 小智は大して意味はなかったがそんなことを考えた。三十五、六歳というところか？ 緑がかった、ツイードのブレザーという服装から推して、固いサラリーマンではないようだった。もっとも、固いサラリーマンなら、水商売の女性と、野球場に現われるこ

ともないだろうが……。

ビール売りが、器用な手付きで、紙のコップ三つにビールを注ぐ。

「さ、いかがです？」

男は、意外なことに、その一つを、小智に渡したのだった。

「え？」と、小智は、あわてた。終戦後、何十回となく、後楽園に通ったが、隣席の未知の人から、何かをおごられたようなことはなかった。

「いや、失礼とは存じましたが、お近づきのしるしに……」

「ははあ……」

「あのう……、どうぞ」と、男のつれの女も、首をのばすようにして、小智に勧める。つくり笑いだろうが、齒の白さが美しかった。先刻まで、彼女は、男がビールを三つ買った理由を知らなかった。それにも拘らず、すぐに、男に同調するあたり、見事なほどに、そつがない。小智は、二人が、単に客とホステスというだけの関係ではないだろうと想像した。

「そうですか？ では……」

小智はビールを受取って、一口で半分ほど干した。ビ

ールは意外に冷えていた。もうそろそろ、屋外で冷えたビールをうまいと感じる季節なのか？

「ところで……」

『お近づきのしるし』を出した以上、話しかけるのは当然の権利だというように、男が言った。「指定席は、まだ、だいぶ空いていますね」

「まあ、何と言っても、今日のメイン・エベントは巨人―阪神ですからね。指定席券を持っていれば、人に取られる心配もないから、ゆっくり来るつもりなんですよ」

「ばかな奴らですな」

男は、吐き出すように言った。単に、言葉のあやだけではなく、心から、そう思っているような、強い口調だった。

「え？ しかし、年間通しのボックス・シートを持っている人たちは、試合全部を見たら、大変だと思うのでしょう。正直言って、国鉄―大洋戦は、添物のようなものだから」

「添え物？ 失礼ですが、あなたは、本当にそう思っているのでしょうか？」

男は、からだの向きを変えた。小智の顔をのぞきこむ

ようにした。彼の眼が据っている。男としては単に座談を交すというだけの意図ではないらしい。

小智は、男をうるさく感じ出した。

「およしなさいよ。ご迷惑よ」と、例の女が、男をたしなめた。

「いや、しかし、ちょっと聞いていたきたいから……」

男は、たしなめられて、気がついたのか、弱気な微笑をもらした。しかし、話はあくまでも、したいらしい。

何をそれほどまでに言いたいのか？　そして、この男はどんな職業を持っているのか？　一方で、うるさく感じながらも、小智は、この男に興味を持った。それは、弁護士という、彼の職業のせいかもしれない。世の中にはいろいろ、変った人間がいる。小智も職業柄、何人もの、そういう人物たちと会っていた。そして、会って話を聞くと、必ず、それだけの収穫はあった。

「つまりですな」

男は、勝手に言葉をついだ。「たしかに、巨人―阪神戦は、一位対四位の試合だし、ペナントをどこが握るかという意味では、この国鉄―大洋戦よりも面白いかもしれない。しかし、考えようによっては百何十試合も、これからやらなければならないのだから、第一戦に、どち

らが勝ったって、大して問題はない。ところが、こっちの試合、あなたが前座試合とおっしゃった方には、重大な意味がある。そうでしょう？　いま終わったばかりの金田対マツクの対決ですよ。もし、最初の対決にマツクが勝てば、自信を持って、これからもどんどん打ちまくるでしょう。そうなると、外人選手の株はますます上り、各球団とも、アメリカに、スカウトを常駐させるようなことになるかもしれない。その意味では、国鉄―大洋戦の方が、面白いわけですよ」

「なるほど、まあ、そういう見方もできるのでしょうが……」

小智は、男が何を言おうとしているのか、はっきりとわからないまま、あいまいに答えた。

「いや、失礼ですが、あなただって、心の奥底では、そんなことを考えていらつしやったと思うのですよ。それが証拠に、あなたはさっき、マツクの一打が併殺打に終わったとき、はつきりと溜息をついたではないですか」

「まあ、それは、やはり一応、緊張していましたからね」

「そうでしょう？　その緊張の意味を分析すると、わたしが申し上げたようなことになるのではないでしょう

か？ いや、あなたばかりではない。あのとき球場全体が、何かどよめいたでしょう？ ここにいる何万人という人が、金田、マツクの対決に息をつめていたわけですから、巨人―阪神戦だけを見に来ようとしている人たちは、こういう緊張を知らないのですな。恐らく、大半は巨人ファンで、巨人以外はプロ球団ではないと考えているでしょうよ。あわれな人たちですな」

男は勝手な意見をのべた。

「しかし……」と、小智は口を挟んだ。どうでもよいことではある。しかし、ただ黙っているだけなのも、能はない。「現状においては、それも仕方がないでしょう。現在のプロ野球の人気は、巨人によって支えられているのですし……」

「いや、そこですよ。わたしの言いたいのは……」

男の口調は、再び熱して来た。それにつれて、声も大きくなる。

小智の前の席にいるアベックが、うるさそうに、ふり返った。

「あ、そうそう、まだ、自己紹介もしていませんでしたな。失礼いたしました」

男は、そう言いながら名刺を出した。

『T探偵社、第四調査課、常沢亮一』

「ははあ……。T探偵社におつとめですか？ わたしも、T探偵社には、知り合いがいるのですが……」

「そうでしょうね。さきほど、背広の胸に、弁護士バッジがついていたので、ことによると、うちのおとくいはないかと、思ったのですが……」

男は、親しげな表情を見せた。

小智も、名刺を受取った手前、自分の名刺を差出した。

2

それ以後、試合の合い間、合い間に、常沢は、いろいろ語りかけて来た。

いったいに、野球は、一人で黙ってみるよりも、隣席に知人でもいれば、その人と話しながら観た方が楽しいものである。よく、球場で、

「しょうがないな。あんなフォームでは……」

とか、

「ここでは、送らせなけりゃあ……」などと、ひとりごちている人がいるが、彼は、そう口に出していることで、隣席の者から話しかけられるのを、秘かに期待している

のではないだろうか？

その意味では、小智は常沢という男の隣に坐ったことを、喜ぶべきなのかもしれない。とにかく、退屈しないで済むのだから……。しかし、常沢の話題は、ゲームと直接に関係のないものであった。日頃から考えていることを、聞く相手を得た機会に、全部ぶちまけてしまおうというような調子なのだ。中には、耳を傾けるべき意見もあったが、真剣に合槌を打っていたら、きりがないとも思われ、小智は、半ば聞き流すようにしていた。

この試合は、結局、3—1で国鉄の勝に終わった。佐藤と金田が、それぞれ、第一号本塁打を放ち、そのほか、佐藤、町田の長短打で1点を挙げたのだった。

そして、勝負そのものと、同じ程度に興味があると言われた、金田、マクマナスの対決は、計四回あったが、マクマナスの打撃はいずれも、凡打に終わり、第一日目に關する限り、金田の圧勝ということができた。

やがて、第二試合が始まった。そのころから、急に常沢は黙ってしまった。いままでの饒舌ぶりを考えると、不思議なほどの変りようである。何か、気に触ったことでもあったかと、小智は心配になった。

それは、常沢と同伴している女性にとっても、同じこ

とだったろう。

「どうしたの？ 何を怒っているの？」と、囁く声の小智にも聞えた。

「うん？ ああ、ちょっと、考えごとをしているのだ」

常沢は、そう答えていた。

この常沢の沈黙が、妙に小智の胸に、ひっかかりを作る。本来、ただ球場で出遇っただけの、いきずりの男について、そんなに気を使う必要もないし、いつもの小智ならば、平気でいられるはずなのだ。それが気になるというのは、常沢に何か人間的魅力があるためなのだろうか？

よく考えてみると、常沢は黙ってしまい、考えにふけり出したのは、巨人の先発投手が城之内と発表されたときからのようだった。

そのとき、常沢は、

「ほう……」と、嘆声に近いものを上げたが、それに付いて、何も意見を述べようとはしなかった。

「へえ、わたしは、中村が先発すると思ったんですがね。まあ、場合によっては、藤田かなとも考えましたが、まさか、城之内がねえ……」と、小智が言ったのに対して、常沢は答えなかった。ことによると、自分の言葉が、

常沢には聞きとれなかったのではないかと、考えたほどであった。

試合は、最初から、阪神が押し気味だった。

オープン戦で、七試合に登板、四勝零敗、防御率も〇・二七と好成績を上げていた城之内も、やはり、開幕第一戦の先発となると、多少、あがっていたのだろうか？ 外野席の小智からは、よくみることができなかったが、一、二回ともコーナー・ボールを安打にされているようだった。そして、ついに、三回には山本哲の中前安打、小山のバント失敗に続いて、三宅秀の二塁打、吉田の安打、さらに並木の中犠飛で二点を先取された。

結局、巨人にとっては、この二点が致命傷だった。七回に、森と代打坂崎の長短打で一点を返し、九回にも、二死満塁と攻めたが、ついに、一点差で開幕第一戦を落したのである。中心打者である長島と王に、一本もヒットが出なかったことが、巨人の敗因の一つに数えられるのではないだろうか？

九回裏の二死まで、隣敗が決まらなかったため途中で席を立つ人も少なく、スタンドから外に出るのに、かなり手間だった。椅子と椅子との間の狭い通路を、靴の底

をひきずるようにして、歩かなければならなかった。自分の意志で歩いているのではなく、人の波に巻きこまれ、その波に動かされているようであった。

小智は、自分のうしろには、当然、常沢たちがいるものだと思っていた。ビールをおごられたままであったから、帰りには、食事に誘おうかという気になり、

「混みますなあ」と、振り返ると、彼のすぐうしろには、女子高校生らしい二人連れがいて、気安く話しかけた小智を、奇妙な顔をして眺め返した。或いは、中年男の小智を警戒したのかもしれない。

あわてて、眼を移すと、常沢は小智より、だいぶおくられていた。女連れであるため、動きが思うようにならないのだろう。

振り返った小智に、常沢は気がついたようだった。手を上げて合図をし、

「失礼しました。今日はこれから、ちょっと用がありますもので……。いずれ、おうかがいすると思います……。」と、ほかの観衆が振り向くほどの大声を上げた。

「じゃあ」

小智も、軽く頭を下げた。考えてみれば、相手は二人連れである。食事に誘ったりすると、かえって迷惑なの

かもしれない。それに、小智としても、あえて、常沢とつき合いたいというほどの欲求はなかった。ただ、ビールのお礼をしなければ悪いかといった程度の気持ちだったのだ……。

だから、常沢の言った、

『いずれ、おうかがいすると思いますが……』という言葉も、単なる、社交辞令だと考えたのだが……。

ところが、常沢は、その翌々日、つまり四月九日の月曜、小智の事務所にやって来た。

その日、小智は午前中だけ、法廷に出て、十二時半ごろ、事務所に帰って来ると、そこに、常沢が待っていたのだった。

彼の事務所は、古ビルの二階にあった。ドアを開けると、すぐの場所に、受付兼タイピストの女事務員矢野真佐子、書類整理役のアルバイト学生竹村竜夫の机が並び、その脇が訪問客の待合所になっていた。そして、衝立が置かれ、その奥に、小智の事務機があるのだ。

最初、待合所に、常沢の姿を認めたとき、小智は「やあ」と、軽く頭を下げたが、それが誰であったか、とっさには思い出せなかった。顔みしりだという印象があったので、会釈をしたのに過ぎなかった。

「どうも……。後楽園では失礼しました」

常沢にそう言われて、初めて、そこにいるノーネクタイの男が、球場の外野席で会った人物だと、思い出したのである。

「いや、こちらこそ」

こう答えたものの、小智は、一瞬とまどった。あの、『いずれお伺いしますが……』と言ったのは、本気だったのか？　そして、あの球場でビールを飲ましてくれたら、話しかけたりしたのは、後日、こうして訪問してくるための、布石にすぎなかったのか？　そんなことを考えたほどだった。職業柄、素直な目で、人を見ることができないのだ。

「何か？」と、聞き返した小智の眼は、だから、警戒心に溢れたものであったろう。

「ええ、ちょっと、ご相談したいことがありますね」

常沢は、小智の表情には気がつかないのか、人なつこく、白い歯を見せて笑いかけている。或いは小智の心理を想像はしていながらも、そのことを気にしようとは考えなかったのかもしれない。私立探偵という彼の職業には、そんな図々しさも必要なのであろう。

「はあ、何か事件にでも？」

「いや、そういうわけではありません。ある事業のことなんです……」

常沢は、あいまいな微笑を見せた。

「事業ですか？」と、時計に眼をやりながら、小智は考えた。別に、何時までにやらなければならないという仕事があるわけではなかった。長い間に、自然に身についた、一つのセスチアードだった。

「お忙しいのですか？　しかし、お手間はとらせません。ほんのちょっとです」

そうまで言われては、このまま追い返すわけにはいかなかった。小智は、常沢を衝立の向うへ通した。

「実はね、先生」

来客用のソファに坐り、向い合うと同時に、常沢は切り出した。後樂園では『あなた』という二人称で、小智を呼んでいたのだったが、今日は『先生』に変わった。そこに、何らかの意図がうかがえるようであった。

常沢は、ポケットから、新聞を取り出した。どちらも、スポーツ新聞だった。

「先生は、新聞をごらんになりましたか？」

「そりゃあ、見ますが……」

「そうですか、では、すでにお気づきだと思いますが、

あの土曜日ですね、パ・リーグの方には、どのくらいの人はいったか、これは非常に興味がある問題なのですか……」

「さあ？　そこまでは読みませんでしたな。何でも、神宮も、後樂園並みに、一ぱいになったそうですね」
たしか、そんな記事を読んだと思いながら、小智は言った。

「後樂園並み？　いやいや、それどころではありませんよ。ここに書き抜いて来ましたがね」

ポケットから、小智はメモを取り出した。葉書大のもので、それには、数字が並べられてあった。

▽四月七日

セ・リーグ

後樂園 四万

中日 五千

パ・リーグ

神宮 五万五千

大阪 六千四百

平和台 九千

▽四月八日